

シンポジウム 「変革の時代に、社会科はどう変わりうるのか グローバリズムとナショナリズムの狭間で」の概要と意義

Summary and Significance of the Symposium Titled "How Will Social Studies
Change in an Age of Change Between Globalism and Nationalism"

中 村 哲
(兵庫教育大学)

1 シンポジウムの概要と趣旨

本シンポジウムは、2007年10月27日(土)と28日(日)の両日にわたり、兵庫教育大学において開催された全国社会科教育学会第56回研究大会と社会系教科教育学会第19回研究発表大会との合同研究大会の企画として次の要領で実施された。

シンポジウムテーマ：

変革の時代に、社会科はどう変わりうるのか

～グローバリズムとナショナリズムの狭間で～
コーディネータ： 中村 哲(兵庫教育大学)

シンポジスト：

小・中学校社会科カリキュラムをどう変える
ーユニバーサル・スタンダードを求めてー

小原友行(広島大学)

ナショナリズムとグローバルリズムの両立をめ
ざす中国の社会科カリキュラムの編成と課題ー上
海の「品德と社会」科を事例としてー

沈 曉敏(華東師範大学)

グローバリズムの視点から見た韓国の社会科カ
リキュラムの編成と課題ー現行及び改訂試案の小・
中学校社会科カリキュラムをもとにしてー

田 鎬潤(長野韓国教育院)

コメンテーター： 岩田一彦(兵庫教育大学)

司会者： 松尾正幸(佐賀大学)

中村 哲(兵庫教育大学)

本シンポジウムは、合同大会テーマ「変革の時
代に社会科の意義を問う」の次の問題提議を踏ま
えている。

「戦後の日本は、民主主義社会の建設と資本主
義社会としての経済的成長を図り、現在のように
国際的に重要な貢献を担う国家として発展してき
た。このような戦後社会の発展において教育は重

要な役割を遂行してきた。その教育の役割の一端
として社会科は、日本の民主主義社会を維持・発
展させる児童・生徒の育成を行ってきたのである。
しかしながら、冷戦終結後、経済を主とするグロ
ーバル化が進む中で、環境問題、人権問題、エネ
ルギー問題などの全地球的問題の対応が求められ
てきている。また、国内的には世界で活躍できる日
本人の形成が求められ、日本人としてのアイデン
ティティ形成や自国理解が重視されてきている。
さらに、戦後日本の教育方針を定めていた教育基
本法が、これまでの教育の現状と21世紀の教育理
念に基づいて平成18年12月に改正され、中央教育
審議会において今後の初等中等教育改革の方策が
検討されている。

このような社会状況の変革の時代に、社会科の
意義を問うことによって今後の社会科のあり方を
考察する。」

この大会テーマの問題提議を受けて、本シンポ
ジウムの企画内容が具体化されたのである。シン
ポジウムの目的は、「戦後の日本における民主主
義社会の維持・発展に寄与してきた社会科が、国
際関係のグローバル化と、国内におけるナショナ
リズム的傾向が強まる中で、どのように変わりう
るのか」という視点に基づいて今後の義務教育段
階における社会科カリキュラムを検討することだ
である。そして、東アジア地域において日本と同様
に「グローバリズムとナショナリズムの狭間で」
社会科教育の改革に取り組んでいる中国と韓国の
教育動向を視野に、義務教育段階における社会科
カリキュラムの編成内容と編成原理を比較するこ
とによって、グローバリズムとナショナリズムの
狭間を超越する知見の解明を期待したのである。

2 シンポジウムの内容

各シンポジストの発表内容は、日本、中国、韓国の社会科教育に関する次の3事項を基本内容とした。

- ① 各国における小学校及び中学校の社会科カリキュラムの編成内容を紹介し、それらの編成原理を説明する。
- ② 小学校及び中学校の社会科カリキュラムにおける学年計画または単元計画においてグローバリズムとナショナリズムの視点が窺われる内容を紹介し、問題点と課題点を指摘する。
- ③ グローバリズムとナショナリズムの視点から前項において取り上げた学年計画または単元計画の改善内容を示す。

各発表内容については、本誌においてまとめられているので、詳しくは各執筆内容を参照されたい。本論では、各発表内容を要約し、その要約内容を踏まえてシンポジウムの意義と課題を指摘する。

小原友行氏の発表では、わが国の学習指導要領に基づく小・中学校社会科教育カリキュラムを考察対象として取り上げ、それらの編成原理と課題を指摘し、ユニバーサルシティズンシップ育成の社会科カリキュラムを提案している。

氏の問題意識は、わが国の社会科教育の歴史的経過、世界的な教育改革の動向、わが国の教育課程改訂の教育理念を視野に社会科教育の今日的課題は、「シティズンシップ教育」としての社会科の再構築にある。このような社会科の理論的性格を重視する立場から新学習指導要領の小・中学校社会科カリキュラム編成の特色と原理を考察する。

社会科カリキュラム編成の特色としては、次のことを指摘する。小学校ではカリキュラムの順次性は同心円の拡大と意味理解を基本としていること、内容領域として空間軸・時間軸・社会軸に基づいていること、中学校では地理的分野の地誌的構成、歴史的分野の年代史的構成、公民的分野の制度的構成になっていること。さらに、これらの特色を有するカリキュラム編成は、意味・意義を解釈する「理解」を基本原理としながらも、事象の特色や事象間の関係を説明する「説明」と行為の合理的判断や社会問題の対策等を行う「問題解

決」の原理に基づくとしている。

このようなカリキュラム構成の原理の帰結として、国家・社会への帰属意識をもたせ、それを支えようとする市民性、すなわち「ナショナリズム・シティズンシップ」を育成することになる課題を述べる。そのような単元の内容として小学校社会科歴史学習の「陸奥宗光と条約改正」の単元展開に見られるように歴史上の人物による社会貢献物語が例示されている。さらに、グローバル社会への対応の必要性を踏まえて「国際社会や世界の中に我が国を位置づけて理解することができるようにカリキュラム編成を行う」内容が、自国理解や自国との関連の世界理解に留まる「グローバルという立場からのもう一つの大きな『ナショナリズム』に陥る問題も指摘する。

これらのわが国の社会科カリキュラムの問題を改善するためにユバーサル・シティズンシップの育成を図る社会科を提唱する。ユバーサルの性格としては「どんな国であろうとも、どんな時代であろうとも共通して存在するものの認識を求めている点では、相対的であるとともにより普遍的なもの」とする。さらに、内容編成の基本としては「民主主義」「平和」「リテラシー」「社会参加・参画」を重視し、カリキュラム編成原理は、「意思決定」「社会参加」にある。「意思決定」は問題場面での自己の行為を科学的な事実認識と反省的に吟味された価値判断に基づいて選択・決定する活動である。また、「社会参加」はよりよい社会を形成していくために合意形成を図ったり、政策立案や制度設計、システムの改善を行う活動である。

このような基本的性格を踏まえて小・中学校社会科カリキュラムとして小中一貫の9年間の「5層6領域」の案が構想されている。シーケンスは、1・2学年が「家族・学校・近隣生活」、3・4学年が「地域社会生活」、5・6学年が「国民生活」、7・8学年が「国際社会」、9学年が「現代社会の課題」のテーマであり、環境拡大方式に基づいている。スコープは、「経済」「民主政治と法」「社会と文化」「環境」「国際関係と平和」という5つの現代社会に関するテーマと「学校の特定課題」の6領域を主としている。そして、各6領域には「空間」「時間」「社会」の3軸を内容構成の視点

として設定している。特に、第9学年では「自分たちの企業を立ち上げてみよう」「自分たちの憲法案を提言しよう」「国際平和貢献プロジェクトを計画しよう」など社会形成を意図する内容になっている。

沈曉敏氏の発表では、中国上海市における小学校の「品德と社会」科カリキュラムを考察対象として取り上げ、その編成原理を考察し、この教科におけるナショナリズムとグローバリズムの視点を組み入れる内容構成の理念と方法を指摘している。さらに、今後の「品德と社会」科カリキュラム編成と授業の課題を述べている。

中国では2001年に発布された「基礎教育課程改革綱要（試行）」と「義務教育課程計画実験案」に基づいて社会系教科の学習指導が図れるようになった。小学校1-2年では「思想品格」と「自然」が「品德と生活」、小学校3-6年では「思想品德」と「社会」が「品德と社会」、中学校1-3年では「歴史」と「地理」が「歴史と社会」、「思想政治」が「思想品格」に再編された。このような国家基準のカリキュラムを踏まえて上海市では特色ある社会系教科を編成している。沈先生は、この上海市のカリキュラム編成に関与され、特に小学校1-5年での「品德と社会」科の教科書開発に中心的に取り組まれている。その意味では、「品德と社会」科の教科書についてもっとも熟知されている立場から、そのカリキュラム編成を検討されているのである。

この教科では、「家庭の一員として」「学校の一員として」「地域社会の一員として」「市の一員として」「国の一員として」「地球村の一員として」の6テーマが設定されて、学年ごとに6単元から8単元が設定されている。これらの単元の内容領域は、社会機関の構成と機能、社会的システムと規範、過去・現在・将来の関係、環境の多様性及び相互影響、直面している問題を基本としている。このような教科の内容に関する順次性としては同心円の拡大に基づき、身近なことから時代や他地域を関連づける構成になっている。さらに、国家の方針として「愛国主義を核とする民族精神を育成」することが重視されている。

なお、その民族精神の中身としては「国の歴史、

国土、伝統文化及び実情を理解し、国土と伝統文化を愛する『国家意識』と『民族の文化アイデンティティ』を持つこと」とされている。また、「平和を愛し、自然や生命を大事にし、誠実で法を守り、科学を尊重し、勤勉で自強である現代社会に必要である『公民人格』（市民性に当たるものと思う）内容も含まれている」と指摘する。

このような性格を有する「品德と社会」のカリキュラムにおいてナショナリズムとグローバリズムの両立を図る方法としては、次の構成を指摘している。

第1点は、「国と民族に誇りを持っているだけでなく、民族性の中にある欠点も分かり、新しい民族精神を作ろうとする意識の形成を重視すること。例えば、小学校3年では「公共秩序を維持しよう」「みんな安全になるために（公共安全）」「みんな健康になるために（公共衛生）」などの単元が設定され、地域社会におけるルールの遵守と改善による町づくりの関与に関する新しい民族精神の形成が図られている。

第2点は、「人間の『需要』や願いの理解を異文化理解の基礎に据える」ことである。例えば、小学校3年では「人々の需要」「買い物の学び」「ごみの行き先を探そう」などの単元が設定され、社会生活において人間が財やサービスへの需要を生み出し、その需要を満たす方法として買い物や公共施設の利用がなされる行為の共通性が理解され、その行為から生み出されるゴミ問題に対する他国の対応が学習されている。

第3点は、「国境を越える人間愛をナショナリズムとグローバルリズムの対立を超える原理として重視すること。例えば、小学校5年では「国境を越えた援助」の小単元が設定され、ユニセフや赤十字国際委員会などの活動が、ヒューマニズム精神に基づいて国境、民族、人種、国籍など諸問題に直面しながら人間の生命や世界平和の重視していることが理解されている。

このような構成の方法が指摘されているが、今後の課題としてカリキュラム全体の編成としてはナショナリズム的性格が強いので、小学生の発達段階を考慮したグローバル視点の活用を指摘している。

田鎬潤氏の発表では、主に韓国における現行の小・中学校の社会科カリキュラムを考察対象として取り上げ、その編成原理を指摘している。さらに、ご自身の学位論文の研究「グローバル教育としての小学校社会科カリキュラムと授業の開発－韓国における小学校社会科カリキュラムの改善を意図して－」の成果を踏まえてグローバルの視点から小学校社会科カリキュラムの課題と改善方案を述べている。

韓国の小・中・高の学校カリキュラムは、小学校1年から高校1年までの国民共通基本カリキュラムと高校2年から3年までの選択カリキュラムによって構成されている。そして、現行社会科は小3年から高校1年まで国民共通基本カリキュラムの教科として設定されている。現行社会科では小学校においては歴史、地理、一般社会の総合的内容になっている。中学校においては7年では地理と世界史、8年では国史と世界史及び一般社会、9年では国史と地理及び一般社会の多領域融合方法で編成されている。なお、2009年から適応される社会科では歴史領域が重視され、小学校では5年、中学校では8年において国史のみの内容になっている。

このような教科構造において小学校社会科カリキュラムは、スコープとしては「人間と空間（地理領域）」「人間と時間（歴史領域）」「人間と社会（一般社会領域）」を踏まえた内容構成になっている。また、シーケンスとしては身近な周りから町・村、市・道、国家、世界へと社会の学習範囲を発達段階に応じて関連づける経験拡大の原則になっている。

このように編成されている現行小学校社会科カリキュラムの課題として、次の3点を指摘する。第1点としては、「社会科教科書にグローバル教育内容が直接に反映された部分が少ない」ことである。グローバルの教育内容としては、環境、人権、紛争などに関する取り扱いが重要になるが、自国理解や国家間理解の内容に留まり、グローバル意識の形成を図る構成になっていないところに問題がある。

第2点としては、「歴史教育の強化と教科書に民族優越性の表現が記述されている」ことである。

特に、2009年から適応される社会科では歴史領域の強化が図られ、自国中心の歴史内容となり、偏狭な思考と自民族優越性を形成する危惧が生じる問題がある。

第3点としては、「社会科カリキュラム構成において伝統的な経験拡大原則の適応」がされていることである。この原則に基づく内容構成では、情報化と国際化が進展している現代社会における児童・生徒の生活実態と乖離するところに問題がある。

これらの問題を改善する方案として、次の3事項を指摘している。第1点としては「社会科教科書に人類と世界（仮称）の設定が必要とされる。なぜなら地球上の人類の生存を脅かす環境・人権・紛争等の問題を取り扱うことによって人類の発展に貢献する民主市民の資質形成が可能になるからである。そして、この人類と世界の領域に関する単元例として「世界は一つ」（16時間）の単元が紹介されている。この単元は、「面白い世界文化」「緑の地球村」「大事な私たち」「共に生きる私たち」の4小単元で構成されている。「面白い世界文化」では世界の食べ物、伝統衣装、宗教文化、祝祭の内容になっている。「緑の地球村」では水、黄砂、気候、森の消滅の内容になっている。「大事な私たち」では人権、基本的権利、差別、人権模擬裁判の内容になっている。「共に生きる私たち」では戦争、平和、共生の内容になっている。この単元例のような人類と世界の領域に関する内容の設定が述べられている。

第2点としては「事実に基にする歴史を児童・生徒に学ばせること」である。2009年からは先に述べたように歴史領域の強化が図られ、自国優先の教育に陥る危惧がある。しかし、外来文化との交流が自国の社会と文化に与える影響やその文化影響の過程で先人が受けた葛藤と苦悩などの歴史的事実の学習を通して、その危惧の克服が可能であると述べる。例えば、日韓の関係を考察する授業として、韓国木浦にある共生園を運営した田内千鶴子、韓国の民芸を評価した柳宗悦、韓国版新ドラリストと呼ばれる布施辰治などの人物を取り扱う事例が紹介されている。

第3点としては、「社会科カリキュラム構成原

理である経験拡大原則の適用である」。国際化と情報化の世界的進展に伴って児童生徒が関与する生活環境も変化している。したがって、経験拡大原則を基にしながら、学習内容は学年の学習対象の空間的枠を超える構成も必要とされる。これらの社会科カリキュラムの改善だけでなく、国家間の教師交流を活性化させるシステム作りも指摘している。

3名のシンポジストからの発表内容を踏まえて、コメンテーターの岩田一彦氏から次の3点が論点として指摘された。第1点は、社会科カリキュラム編成におけるグローバリズムとナショナリズムの内容をどのように結びつけて構成するのか。第2点は、社会科カリキュラムの基礎的編成の軸になる時間、空間、社会をどのように体系的に系統づけるのか。第3点は、ナショナリズムとグローバルリズムの問題に関連する民族精神をどのように取り扱うのか。これらの論点については発表者から各自の考えが説明され、さらに会場からの質問を交え、進行された。

3 シンポジウムの意義と課題

本シンポジウムの目的は、先に指摘しているように国際関係のグローバル化と国内におけるナショナリズム的傾向が強まる中で、社会科がどのように変わるのかという問いかけで、義務教育段階の社会科カリキュラムの展望を、中国と韓国社会科カリキュラムの改革動向と比較することを通して解明することである。このシンポジウムの目的との関連で、本シンポジウムの意義と課題を指摘すると次のように言える。

第1点は、日本、中国、韓国の東アジア地域における社会科及びその関連教科において国際関係のグローバル化と国内におけるナショナリズム的傾向に対応したカリキュラム編成が共通の課題であることが理解されたことである。これまでの社会科教育研究では、アメリカ、イギリス、ドイツ、中国、韓国などの国ごとの社会科教育が研究対象として取り上げられてきた。それらの研究において市民的資質形成を担う社会科教育のモデルとして市民社会を形成してきた欧米社会の社会科教育研究が主になっている。したがって、アジア地域

における社会科教育研究の関心は希薄であった。しかしながら、日本、中国、韓国の東アジア地域における各国の社会科教育に関する教育状況と共通課題の理解を通して、それぞれの国や地域における社会科関連教育への研究関心が高められたと言える。

第2点は、この課題に対してどのように対応するのかという知見として社会科カリキュラム編成の基本的考えと単元構成における改善視点が明示されたことである。小原友行氏の内容においては、ユバーサル・シティズンシップの育成を図る社会科カリキュラム案が提案されたのである。沈曉敏氏の内容においては、新しい民族精神の意識形成を重視すること、人間の「需要」や願いの理解を異文化理解の基礎に据えること、国境を越える人間愛をナショナリズムとグローバルリズムの対立を超える原理として重視することが提案されたのである。田錦潤氏の内容においては、地球上の人類の生存を脅かす環境・人権・紛争等の問題を取り扱うこと、外来文化との交流による自国の社会と文化に与える影響とその文化影響の過程で先人が受けた葛藤と苦悩などの歴史的事実を学習すること、経験拡大原則を基にしながら学習内容は学年の学習対象の空間的枠を超える構成も行うことが提案されたのである。

これらの提案は、基本的にはグローバルな社会状況において民主主義社会の維持と発展に関与する児童生徒を育成する社会科カリキュラムをどのように編成するのかという全体的なカリキュラム編成に関する内容とそのカリキュラムにおける単元内容構成に関する内容が示されたのである。岩田一彦氏が指摘された3論点でいえば、前者の全体的なカリキュラムの論点は第2点の時間、空間、社会のカリキュラム編成の軸に関することである。後者の単元内容構成の論点は第1点のグローバルとナショナルの関連づけに関することと第3点の民族精神に関することである。また、各発表者の提案内容については、小原友行氏の提案内容であるユバーサル・シティズンシップの育成を図る社会科カリキュラムは前者の論点に関する内容である。沈曉敏氏の「品德と社会」の改善内容は後者の論点に関する内容である。田錦潤氏の改善内容

は両論点に関する内容である。

第3点は、欧米の社会科教育をモデルとする社会科カリキュラムだけでなく、東アジア地域における地域関連を踏まえた社会科教育のあり方への関心を誘発させたことである。その研究関心の例として、参加者から社会科カリキュラムの構成において地域、国、世界との空間的拡大で構成されているが、東アジア地域などのような地域的範囲の内容構成の可能性もあるのではという指摘がなされた。さらに、本シンポジウムの企画内容と呼応する動向として日本社会科教育学会主催の「東アジア的市民性の育成と社会科教育」という企画で東アジア社会科サミットが2007年10月6日に開催された。その問題意識としては、「アメリカで生まれた『社会科』がアジアなどの地域にどのように定着するのか」にある。このような研究動向にも伺われるように東アジア地域と称される国家単位を超える教育研究の関心も誘発したと言える。

今後の課題としては、参加者、コメンテーターの岩田一彦氏、司会の松尾正幸氏から指摘されたことが挙げられる。ユバーサル・シティズンシップの育成を図る社会科カリキュラムについては次の指摘内容である。

シーケンスの環境拡大の原理に対して、同心円拡大方式における社会的意味理解の全体と個との関係を踏まえた考えを再評価する必要があること。スコープの内容については空間、時間、社会の枠組みを踏まえて内容の具体化を図ることが児童生徒の社会的資質形成に寄与すること、ユニバーサルに関する具体的視点を空間、時間、社会の枠組みに組み入れること。

グローバルとナショナルの関連づけについては、国境を越える人間愛の視点に基づく内容構成の前提として社会の仕組みや関係などの社会認識に関する内容を踏まえる必要があること。民族精神の取り扱うについては、国家や民族というまとまりではなく、学校を中心とした地域への帰属意識の形成を図る考えも検討に値すること。なお、この指摘は、本シンポジウムが日本、中国、韓国の国家間の課題としているが、それぞれの国における多文化にともなう教育課題も視野に入れる必要があるという参加者の指摘とも関連する。

さらに、社会科カリキュラム編成におけるグローバリズムとナショナリズムの内容をどのように結びつけて構成するのかという考察において、本シンポジウムでは議論が十分になされなかったのであるが、自国の伝統と文化の取り扱いを検討する必要がある。周知のように、日本では「わが国の伝統と文化」に関する教育内容が戦後教育の再生を図るために、平成18年12月に改正された教育基本法を踏まえて本年3月に告示された学習指導要領において重視されている。そして、伝統と文化に関する内容が、平成23年度には小学校、平成24年度には中学校の教育課程全体で取り扱われるようになる。

わが国において伝統と文化に関する教育が重視されるようになってきた背景には、戦後約60年の我が国を取り巻く国際社会と我が国における社会生活の変化が指摘できる。このような背景を視野にすると、自国へのアイデンティティ形成なしに国際社会への対応は難しい、しかし自国へのアイデンティティの形成を強化すると偏狭な自国中心主義に陥る問題が生じる。このジレンマが、本シンポジウムの副題である「グローバリズムとナショナリズムの狭間」である。その意味でも新学習指導要領に基づく教育課程において重視されている伝統と文化に関する内容の扱いを具体的に検討することは重要な課題である。

これらの意義と課題を踏まえて、今後の社会科教育のカリキュラムと授業の改善を期待したい。

参考文献

- ① 『全国社会科教育学会・第56回全国研究大会 社会系教科教育学会・第19回研究発表大会 合同研究大会 発表要旨集録』平成19年10月 pp.77-83
- ② 日本社会科教育学会国際交流委員会編『東アジアにおけるシティズンシップ教育』明治図書 平成20年11月。
- ③ 拙稿「伝統と文化に関する教育の重要性」文部科学省教育課程課/幼児教育課編集『初等教育資料』東洋館出版 No.830 平成20年1月 pp.68-73